「会員短信 45」

「俳句はすぐ側に」　　相原共良

俳句を最初に詠んだのは、小学五年生の頃である。当時、『少年クラブ』という雑誌を定期購読していたが、俳句欄やクイズ欄があり、時々投稿していた。その頃、「勉強をしてる背中にすきま風」という句を作り掲載されたことがあった。クイズ欄では一等賞になり、ジュラルミンでできた組み立て式の飛行機をもらったこともあった。

昭和二十一年頃には、近所で三好茱萸子を主宰とする句会が結成され、およそ三十名が活動していた。日赤松山病院長であった酒井黙禅や、波名野晋平、越智村雨、森薫花壇、品川柳之ら諸先生からも指導を受けていた。百回の開催を記念して句集を発刊した時には、虚子をはじめ俳人や関係者からお祝いや励ましの手紙をいただいている。私は句会に出たことはなかったが、父達が吟行に出かけるに際には、黙禅先生の風呂敷包みを持ち、お寺の階段を登る先生の背中を押したことを覚えている。中学生の時は学校新聞の編集長になり、仲間と投稿された俳句や文章をまとめあげ、ガリ版印刷をしていた。

今振り返ってみると、子どもの頃から生活のすぐ側に俳句があったが、本格的に俳句を始めたのはこの十年くらいである。「糸瓜」主宰の篠崎圭介先生に師事していたが逝去されたので、八木会長が指導しておられる松風会の句会に参加するようになった。改めて俳句の面白さ楽しさを実感できるようになったが、まだ思うように句が詠めない。これからも自分にしか詠めない句を追求していきたい。

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。